

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



法隆寺大鏡

第三十八集

始



法隆寺大鏡第卅八集挿圖解説

第一、第六、金堂 木造著色多聞天王立像

總丈先背廣七尺五寸八分
身長四尺四寸四分廣二尺一寸
先背一尺九寸三分

第七、第十、同 木造著色持國天王立像

總丈先背廣七尺五寸一分
身長四尺四寸四分廣二尺〇八分

本像は天平十九年の資財帳に收録せられず、古今目錄抄初めて其名を記するを以て觀れば、天平の資財帳論以後、鎌倉時代に至るの間に於て、他より移し來れるものと云はざるを得ず、其年期推すに由なく、本源地亦固より知るべからずと雖も、此二天王と類を同くせる廣目天像の光背には、孝徳紀に因りて知られたる彫刻家山口大口の銘記あり、其様式も亦今や何人にも普通なる佛教渡來時代の北魏風を模したるものなれば、四天王四軀皆同時の作にして、唯其作家を異にせるのみなり、即是れ我國に遺存する最古の四天王像にして、其木造著色なるよりすれば、佛教國現存像中最初のものとなはざるを得ず、相貌軀幹を注視すれば立體を形成する上に於て、正面と側面との移る處、角張りて生硬の氣を脱せざるは、獨立の九彫となりて口尙は淺きの感あり、座崖式或は平面より彫り出されて、未だ背面を失はざる時の像を存せり、層重せる鬘、同一曲線の使用を刻して刀痕極めて淺きは、石刻より出でて未だ其技の發達せざるを示せる也、佛像彫刻の發達徑路は、主として材料の變遷に由れるを思はば、本像の如き殊に其深の真味と資料とを與ふるものと云ふべ

し、像は何人も知れる如く木彫をとれるを以て、金屬石彫と異りて、着色もて其肉身を塗り、服飾の細部を繪けり、此の如きもまた材料の一變と共に、莊嚴に自由の天地を啓けるもの、兜を透彫鍍金とし、其他服飾中に同様の金屬を覆輪とせしめまた木彫の起ると共に各種の材料の混合使用の便宜を得たりしを知るべし、光背も木金併用なる多聞天の光背の裏には藥師德保上面鐳師羽古二人作也とあるに由りて見るも、彫刻家たる藥師德保と金屬専門家たる羽古との二人の記名せられて、共に重ねられたりしを知るに足る、二天王の兩側に乗れたる幅廣の帶の如きものは、廣目天像のによりて近年の補作に係り、持國天の右には、目錄抄に此太刀者欽明天皇御時自百濟渡敏達天皇獻歷戶王子給と云へる御劍ありしかど、今は御物となりて寺内に存せず。

第十一、第十三、網封藏 金銅觀世音

菩薩立像 實寸

二軀に化佛を正面にせるよりすれば、疑もなき觀世音菩薩の像なり、其様式よりすれば小なるものは大なるものより古調を存し、共に古撰の作なりと雖も、多少年代の相違を其間に認むべきに似たり、

第十四、夢殿 木造著色善女龍王立像

總高七寸九分

此像元と夢殿觀音の厨子内に安置せられ、鎮火の神として崇められたりと云ふ、安置の年代詳かならざれども、其製作様式を考ふるに鎌倉中葉頃と認めらるれば、其頃よりしての事なるべし、善女龍王像は繪畫にも彫刻にも其類少く、形相にも本像の如く龍身を負へる

老彌寺大聖殿世八集辨圖釋

此は、... 聖殿の... 世八集... 辨圖釋... 聖殿の... 世八集... 辨圖釋...

太平武運長久... 元祿七年甲戌十一月嘉辰... 母儀桂昌院本庄氏... 紋所に徳川家と本庄家とを並び用ゐて、更に其の寄進主を明かにし...

もの、僅に龍尾を露の端に現せしもの等あり、然り而して本像は此形式に於て現存する最古の一と云ふべき也。

第十五、繪殿及舍利殿 桁行六十八尺八寸八分 棟間二十九尺五寸二分

第十六、適合の間

第十七、舍利殿外陣

繪殿は脊て太子繪傳を殿壁に装せしを以て此名あり、舍利殿と相連り、其中間を古來適合の間と呼び倣せり、其構造舍利殿と同じく、古今目錄抄にも舍利殿繪殿共有婁南面有高檻西南東階有之と記載し、今もまた其制を存して繪ることなし、本尊は則ち有名なる夢達觀音像なり、殿壁の繪傳は夙に撤去せられ、明治十五年宮内省に献納せられたり、撤去の後今の殿壁を飾るものは、天明四年彌勒院主千範本願となり、書工吉村友貞に臨寫せしめたるものなることは前の集に詳説せるが如し、

第十八、銅燈爐

總高十二尺七寸、石基高一尺七寸六分 燈蓋高寶珠八四尺三寸、火舎高一尺七寸四分 平長清花及反花八四尺四寸八分、燈高九寸

燈籠は大講堂の正面に在り、近く前に金堂五重塔を左右に相望む、其の造立次第は竿に鑄出されたる銘文に明かなり、文にいふ

謹獻 永代常燈籠於大和國 法隆寺靈前爲

征夷大將軍源公新祝天下



聖徳太子

11 像立天開多色若耶木 今金

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

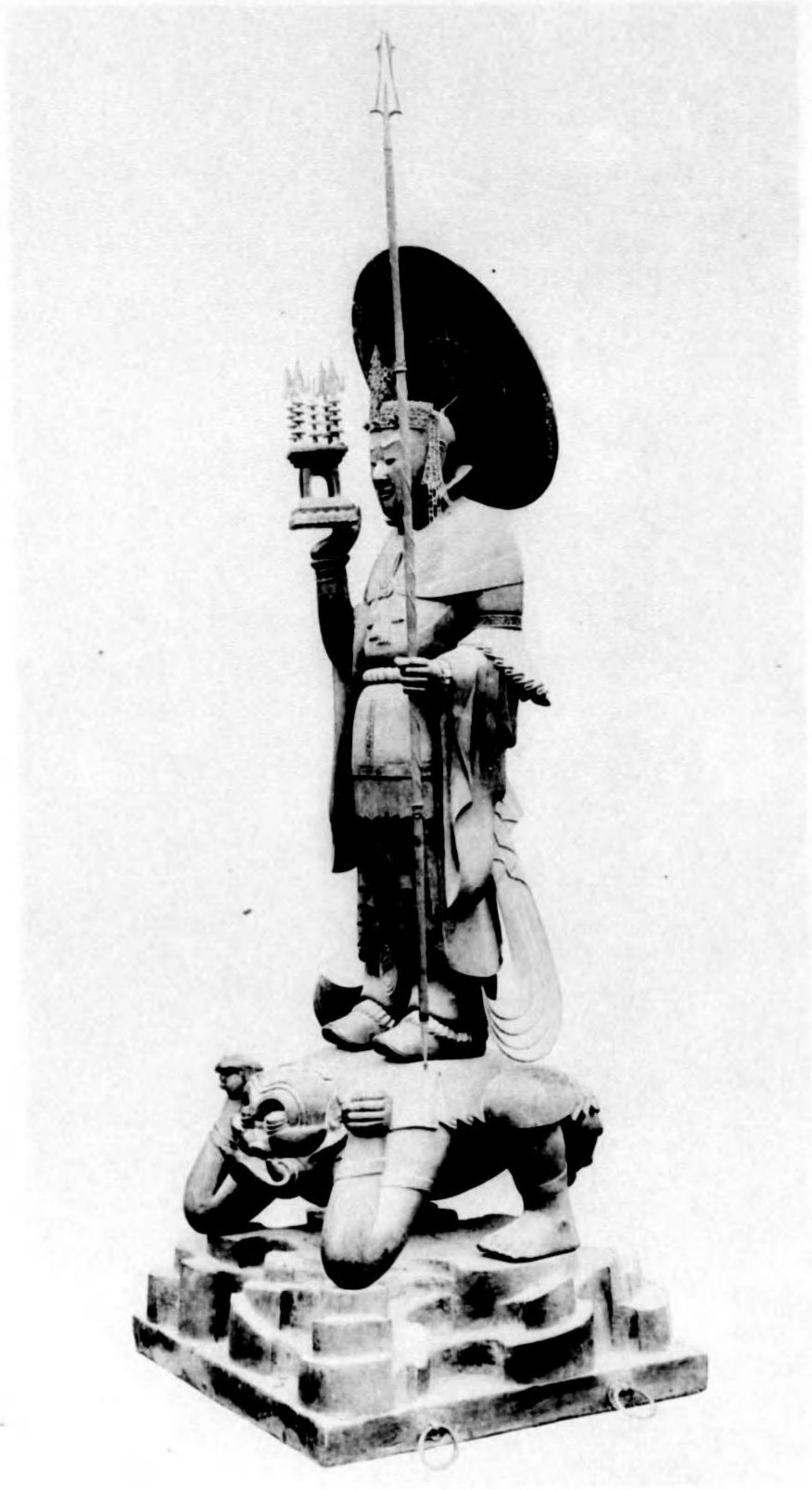
聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

聖徳太子の御影

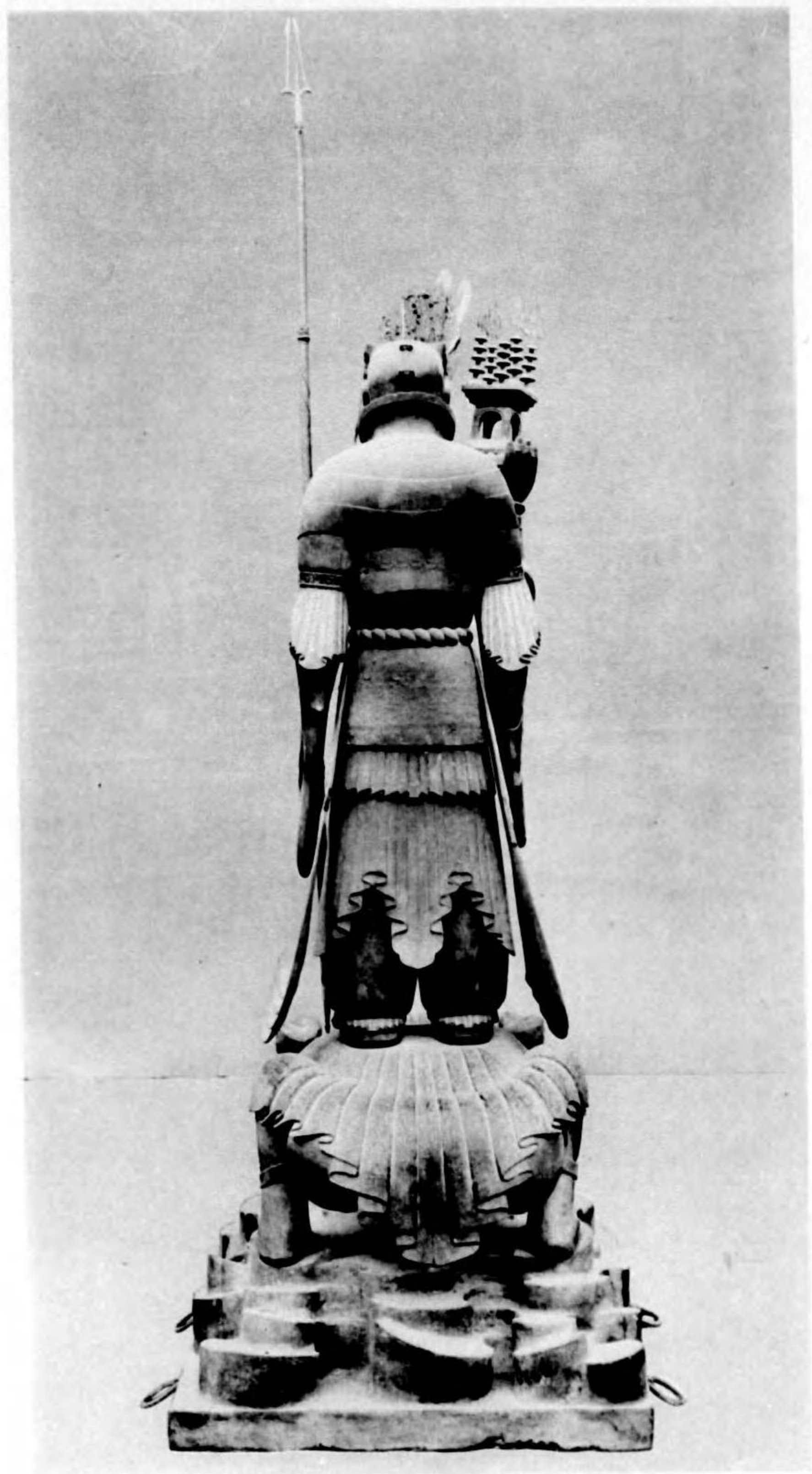
聖徳太子の御影

聖徳太子の御影



五

全堂 木彫彩色天開王像



高僧八景

高僧八景 高僧八景 高僧八景



法華八集

111 像立丁天開多色看那本 堂金



國立中央研究院
歷史語言研究所

五、南京下天關多色石車本、寸全



藥師德林上
鐵師乳文作之

18.0 像立 | 天開多色若那木 空全



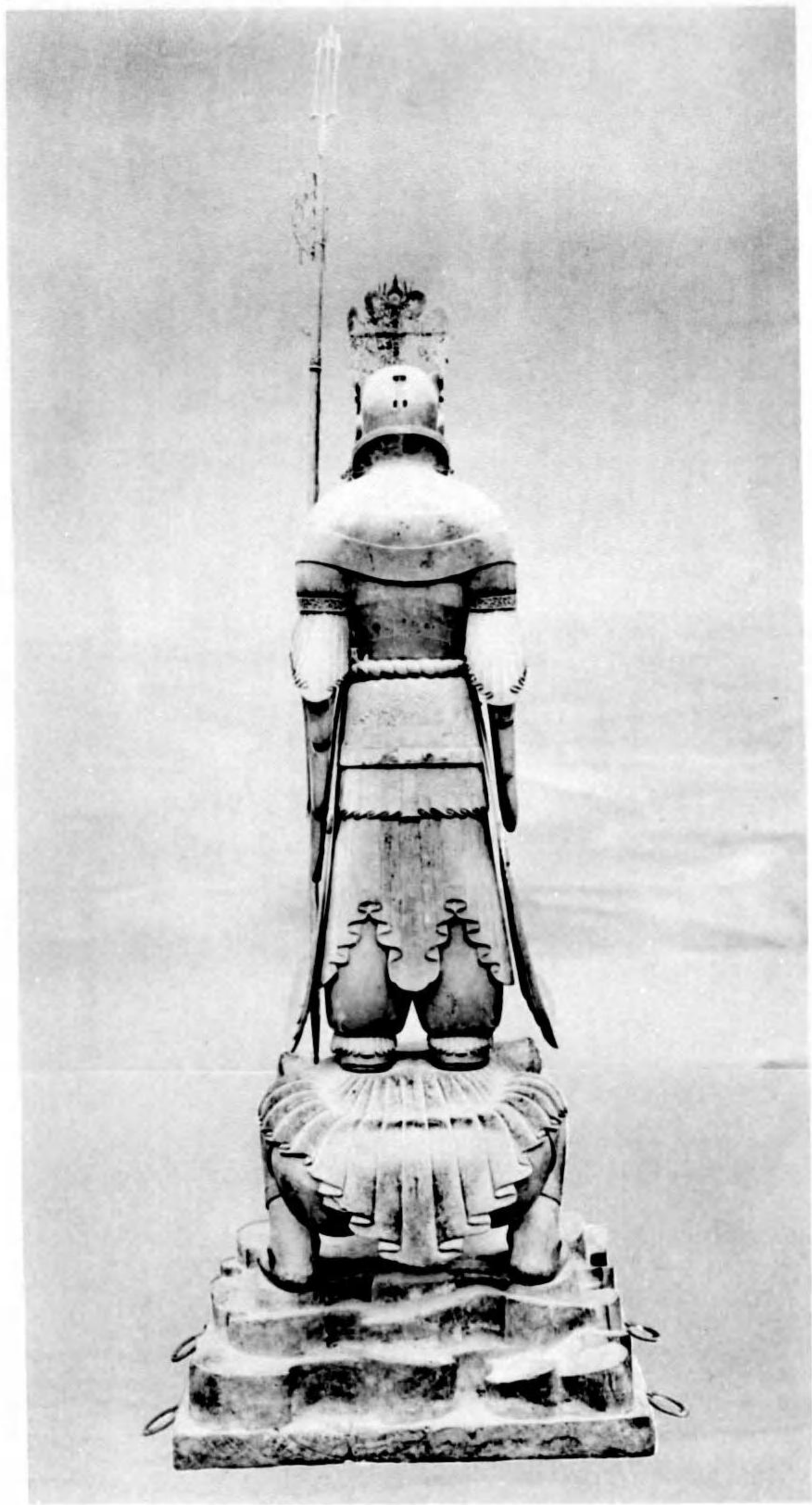
京都府立博物館蔵

形像立千天國特色在彫木 寺金



石造菩薩立像

111 像立十天國持色石用本 寺金



佛立王天國持色香瓶本 守金

佛立王天國持色香瓶本 守金



佛立十人國柱色香那木 空全

佛立十人國柱色香那木 空全



FIG. 10. — Standing Bodhisattva. (Left) — Standing Bodhisattva. (Right) — Standing Bodhisattva.



17 - 18

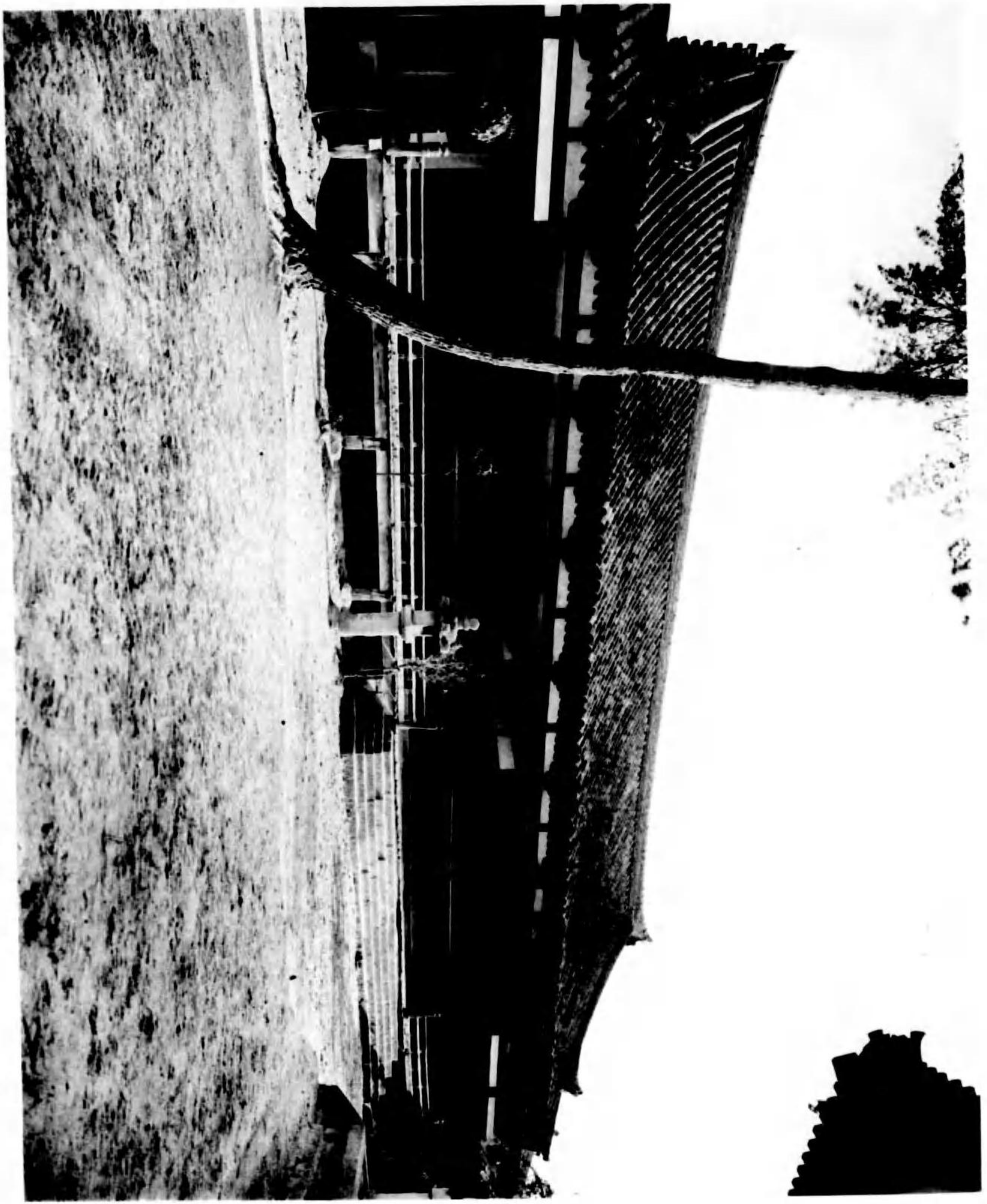


菩薩立像



Figure 28

Figure 28

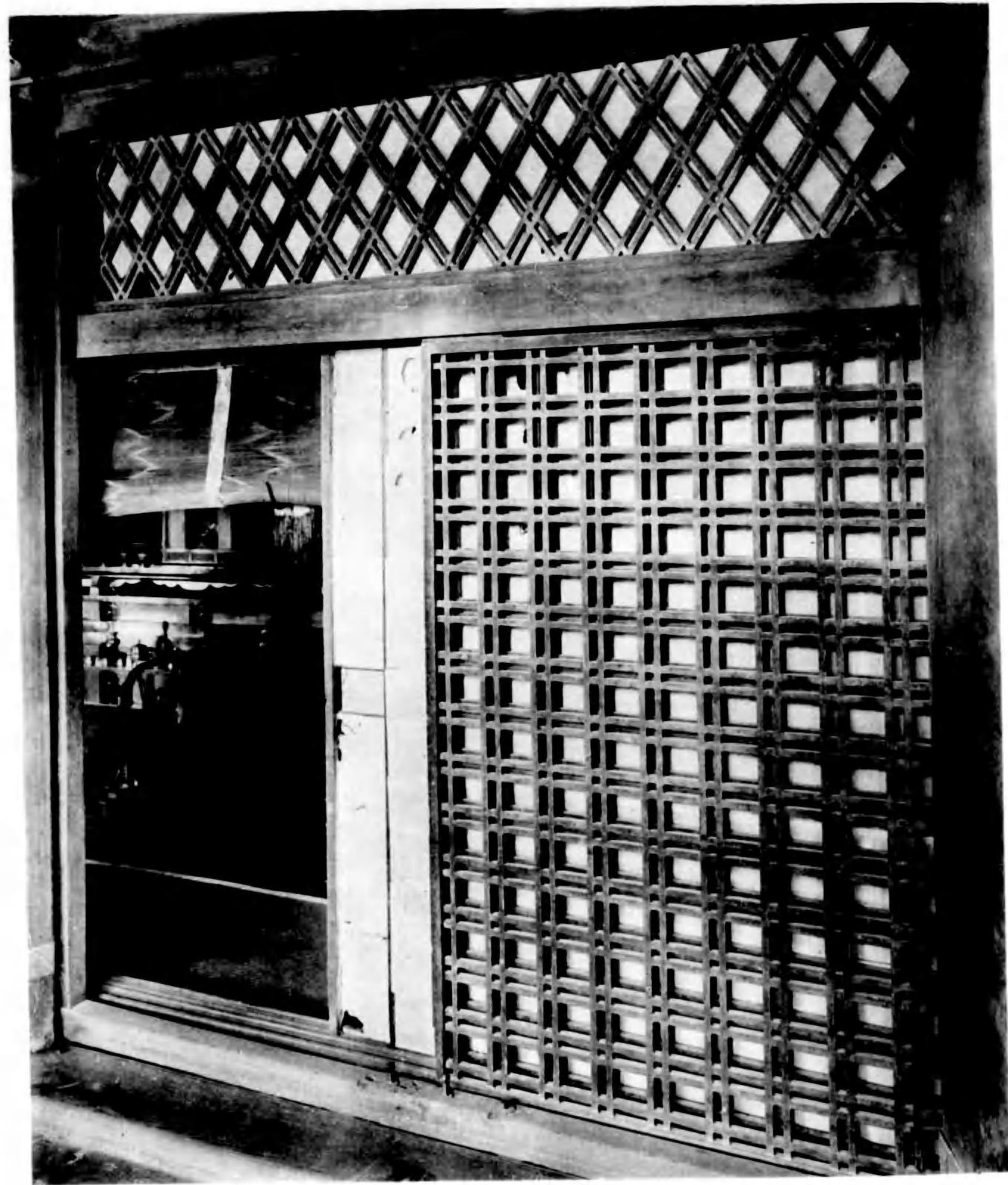


1934



1915

五五五



五五五

五五五



大正五年十二月廿六日印刷
大正五年十二月三十日發行

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 東京市下谷區上根岸町百廿二番地 白石村治
印刷者 東京市下谷區中根岸町六十八番地 武田勝之助
印刷所 東京市下谷區中根岸町六十八番地 墨彩堂

終

